

活動と資料

臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識



河野和歌子¹⁾, 國丸 周平²⁾, 新井香奈子²⁾

¹⁾ 友仁訪問看護ステーションすずらん

²⁾ 滋賀県立大学人間看護学部

要旨 本研究は、訪問看護事業所で行われる臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識を明らかにすることを目的とした。属性、看護学生と同行して療養者宅へ訪問することについての感じ方9項目(楽しい、緊張する、気合が入る、ストレスである、不安がある、気が重い、気が減入る、好きだ、面倒である)、および同行訪問による自身への影響3項目(学びを深める機会になる、新たな発見がある、看護を見直す機会になる)について質問紙調査を行った。感じ方について最も多くの訪問看護師が「当てはまる」と回答した項目は「気合が入る(55.2%)」であった。自身への影響では、自身の看護を「見直す機会になる(87.5%)」「学びを深める機会になる(84.4%)」「新たな発見がある(80.2%)」のいずれの質問も80%以上が「当てはまる」と回答した。実習担当者役割の経験がある者や実習指導者講習を受講している者ほど、学生を訪問看護サービスに同行させることについて好意的に捉え、自身を成長させる機会として捉えていた。

キーワード 在宅看護学実習, 看護学生, 同行訪問, 訪問看護師

I. 背景

現在、日本における看護基礎教育機関で実施されている在宅看護学実習の多くは、訪問看護事業所で行われている。訪問看護事業所で行われる臨地実習は、一般的に療養者宅への訪問に教員が同行しないため、多くの訪問看護師が訪問看護事業所の外で学生と1対1で実習指導に当たっている(牛久保, 飯田, 小笠, 田村, 斎藤, 棚橋, 2015)。そのため、訪問看護事業所での臨地実習指導状況を、他の訪問看護師や教員が直接把握できない環境下で指導が行われているといえる。また、訪問看護事業所での臨地実習は訪問看護師が学生を連れて訪問看護サービスとして療養者宅に赴く方法で行われており、事業所内の9割の訪問看護師が実習指導を行っている(東海林, 森鍵, 大竹, 細谷, 小林, 2016)ため、実習指導担当者の役割を担う者以外の多くの訪問看護師も実習指導を行っている現状がある。訪問看護師が実習指導について学ぶ機会として「特定分野における保健師助産師看護師実習指導者講習会実施要綱(厚生労働省, 2016)」に基づいた研修が各都道府県主催で開催されているが、訪問看護事業所は病院と比較して小規模で運営されており、人材に限られているため、訪問看護師が実習指導に関する研修を長期にわたって受講することは難しい状況にあ

る。つまり、臨地実習での学生への指導方法とその内容は訪問看護師個人の裁量に任されているのが現状といえる。また、訪問看護師による実習指導に焦点を当てた研究はほとんどみられず、その実態は十分明らかになっていないと考えられる。

臨地実習における学生の学びに関して、滝島, 大藪(2019)は、教員や指導者、病棟スタッフとのかかわりが影響を及ぼすと述べている。加えて、訪問看護事業所における臨地実習での学生の学びに関する先行研究(加藤, 高田, 石原, 2022; 菊池, 塚原, 2022; 松下, 陶山,

Home care nurses' perceptions of accompanying students to services during nursing practice

Wakako Kawano¹⁾, Shuhei Kunimaru²⁾, Kanako Arai²⁾

¹⁾ Yujin Visiting Nursing Station Suzuran

²⁾ School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2023年9月30日受付, 2024年1月22日受理

連絡先: 新井香奈子

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町 2500

電 話: 0749-28-8639

F A X: 0749-28-9508

e-mail: arai.k@nurse.usp.ac.jp

田中, 2019; 野中ら, 2019) では, 学生は訪問看護師の姿を見て学びを深めていることが明らかとなっている。これらのことから, 訪問看護事業所での臨地実習においても学生は, 訪問看護師とのかかわりを通して学びを深めていると考えられる。そのため, 訪問看護師による指導は学生の学びを左右する鍵であるといえる。

以上のことより, 訪問看護師が行う実習指導に焦点を当てて研究を行うことは, 訪問看護事業所で行われる臨地実習における質の高い指導方法を検討するうえで意義があるといえる。

II. 目的

本研究の目的は, 訪問看護事業所で行われる臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識を明らかにすることである。

III. 用語の定義

同行訪問: 本研究では, 訪問看護事業所で行われる臨地実習の中で訪問看護師が, 看護基礎教育における看護学実習中の学生を訪問看護サービスに同行させることを「同行訪問」と称す。

IV. 方法

1. 研究デザイン

Web アンケート機能を用いた質問紙調査法。

2. データ収集方法および研究対象者

A 県看護協会に登録されている A 県内にある全訪問看護事業所に研究依頼および Web 回答フォームのリンクが記載された研究協力依頼書を送付した。送付は研究者が所属している事業所を除いた 151 の訪問看護事業所に行い, アンケートの Web 回答を募った。研究対象者となる条件は, 過去 5 年以内に訪問看護事業所で行われた臨地実習において, 学生を訪問看護サービスに同行させた経験を有している訪問看護師とした。

3. 調査内容

1) 属性

年代, 雇用形態, 役職, 看護師および訪問看護師経験年数, 指導者講習履修の有無。

2) 学生を訪問看護サービスに同行させることに対する認識

研究者らで独自に設定した, 同行訪問についての感じ方 9 項目 (楽しい, 緊張する, 気合が入る, ストレスで

ある, 不安がある, 気が重い, 気が滅入る, 好きだ, 面倒である), および同行訪問による訪問看護師自身への影響 3 項目 (自身の学びを深める機会になる, 新たな発見がある, 自身の看護を見直す機会になる) の計 12 項目について, 「非常に当てはまる」「やや当てはまる」「どちらともいえない」「やや当てはまらない」「全く当てはまらない」の 5 件法での回答を求めた。

4. データ収集期間

倫理委員会承認後の令和 5 年 6 月 9 日～令和 5 年 7 月 7 日を Web 調査期間とした。

5. 分析方法

分析対象者の属性および同行訪問に関する 12 項目の認識は, 単純集計および記述統計でデータ分布を確認した。その際, 12 項目の回答結果について「非常に当てはまる」「やや当てはまる」を「当てはまる群」に, 「非常に当てはまらない」「やや当てはまらない」を「当てはまらない群」に分類し, 「どちらともいえない群」の 3 群間で解析を行った。その後, 臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることについてどのように感じているか (計 12 項目) と基本属性についての比較には, カイ二乗検定を行い, p 値が 0.05 未満の場合には有意な差があると判定した。看護学生と同行して療養者宅へ訪問することについてどのように感じているか (計 12 項目) の各変数間の相関関係の強さについては, Person の積率相関係数を求め, 0.5～0.7 未満を相関が強くあると判断した。統計解析ソフトは, IBM SPSS Statistics24 を使用した。

6. 倫理的配慮

本研究は, 滋賀県立大学看護学系研究倫理専門委員会にて承認 (承認番号第 921 号) を受け実施した。Web 回答をもって, 研究参加に同意したものとした。

V. 結果

1. 対象の属性 (表 1)

96 名の訪問看護師より有効回答 (有効回答率 100%) を得た。回答者の看護師経験年数は 2 年～41 年 (平均 22.9 年, 標準偏差 ±8.1), 訪問看護師経験年数は 1 年未満～28 年 (平均 10.9 年, 標準偏差 ±6.9) であった。

回答者内訳で最も多くを占めていたのは, 雇用形態: 常勤 85 人 (88.5%), 実習担当者経験: あり 72 人 (75.0%), 看護師経験年数: 20 年代 42 人 (43.8%), 年代: 40 代 39 人 (40.6%), 現在の役割: 実習担当者 37 人 (38.5%), 訪問看護師経験年数: 5～9 年 32 人 (33.3%) であった。実習指導者講習は, 訪問看護分野以外に比して, 訪問看護分野受講経験者が 33 人 (34.4%) と多くみられた。

表1 対象者の背景 (N=96)

項目	n(%)	or 平均±標準偏差	
現在の役割	管理者	31(32.3)	
	実習担当者	37(38.5)	
	スタッフ	28(29.2)	
管理者経験	あり	32(33.3)	
	なし	64(66.7)	
実習担当者経験	あり	72(75.0)	
	なし	24(25.0)	
雇用形態	常勤	85(88.5)	
	非常勤	11(11.5)	
年代	20～29歳	3(3.1)	
	30～39歳	11(11.5)	
	40～49歳	39(40.6)	
	50～59歳	38(39.6)	
	60歳以上	5(5.2)	
看護師経験年数	5年未満	1(1.0)	
	5～9年	6(6.3)	
	10～19年	24(25.0)	
	20～29年	43(44.8)	
	30年以上	22(22.9)	
訪問看護師経験年数	5年未満	19(19.8)	
	5～9年	32(33.3)	
	10～19年	31(32.3)	
	20～29年	14(14.6)	
実習指導者	訪問看護分野	経験あり	33(34.4)
		経験なし	63(65.6)
	訪問看護分野以外	経験あり	18(18.8)
		経験なし	78(81.3)

2. 同行訪問について感じていること (図 1)

気合が入る 53 人 (55.2%), 緊張する 46 人 (47.9%), 楽しい 44 人 (45.8%), 不安がある 35 人 (36.5%), ストレスである 34 人 (35.4%), 気が重い 28 人 (29.2%), 好きだ 26 人 (27.1%), 面倒である 20 人 (20.8%), 気が減入る 14 人 (14.6%) の順に「当てはまる」の回答数が多かった。

3. 同行訪問について感じていること (属性比較) (表 2-1)

「好きだ」と現在の役割 ($p < 0.05$), 「気が重い」と実習指導者講習経験 (訪問看護分野以外) ($p < 0.01$)

に有意差がみられた。

4. 同行訪問について感じていること (各変数間の相関) (表 3)

「緊張する」と不安があるおよびストレスである ($r = .574, r = .513$), 「不安がある」とストレスであるおよび気が重い ($r = .608, r = .553$), 「ストレスである」と気が重いおよび気が減入る ($r = .689, r = .548$), 「気が重い」と面倒であるおよび気が減入る ($r = .568, r = .560$) において正の相関がみられた。

5. 同行訪問による訪問看護師自身への影響 (図 1)

看護を見直す機会になる 84 人 (87.5%), 学びを深める機会になる 81 人 (84.4%), 新たな発見がある 77 人 (80.2%) と、全ての項目において 80% の回答者が「当てはまる」と回答していた。

6. 同行訪問による訪問看護師自身への影響 (属性比較) (表 2-2)

「学びを深める機会になる」と実習担当者経験の有無および雇用形態 ($p < 0.05, p < 0.01$), 「看護を見直す機会になる」と実習担当者経験の有無および実習指導者講習受講 (訪問看護分野), 実習指導者講習受講 (訪問看護分野以外) ($p < 0.05, p < 0.05, p < 0.05$) で有意差がみられた。

VI. 考 察

本研究では、A 県内にある訪問看護事業所に所属する訪問看護師が持っている、臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対する認識を明らかにした。その結果、同行訪問が及ぼす影響について 8 割以上の訪問看護師が、看護を見直し学びを深める機会になるとともに新たな発見があると認識していた。

1. 臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識

結果では「気合が入る (55.2%)」, 「緊張する (47.9%)」の 2 つの項目において約半数が「当てはまる」と回答していた。いずれの回答においても訪問看護師は、学生を訪問に同行させることに対して訪問看護師自身の気を引き締めている様子が明らかとなっている。訪問看護事業所での臨地実習は、訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させるために、学生とともに訪問看護事業所の外に出て療養者宅へ赴くといった特徴がある。同行訪問中の実習指導と学生の安全確保を行う責任は、学生と訪問を共にする訪問看護師が担うこととなる。そのため、実習指導に関して訪問看護師にかかる負担は、病院や病棟で行われる実習と比較して重いことが考えられる。これらのことより、実習指導は訪問看護事業所の外で学生と 1 対 1 で行われるといった実習方法の特殊性が影響し

て、訪問看護師は同行訪問に対して責任や負担を感じ、自身の気が引き締まるものだと認識していると考えられる。

また、「ストレスである」と気が減入る ($r=.560$)、「緊張する」と不安がある ($r=.574$) およびストレスである ($r=.513$)、「不安がある」とストレスである ($r=.608$) および気が重い ($r=.553$) で正の相関がみられていることが明らかとなった。臨地実習を受け入れている訪問看護事業所内の9割の訪問看護師が実習指導を行っているという先行研究(東海林ら, 2016)から、実習指導は事業所全体で行われているものと考えられる。また、訪問看護事業所の平均常勤換算従事者数は6.8人(厚生労働省, 2017)と比較的小規模な事業所が多いことから、一人の訪問看護師にかかる実習指導の負担は大きくなると推察される。これらのことから、訪問看護師は、個人が実習指導に抱えている不安や苦手意識の有無にかかわらず、指導を担当せざるを得ない状況にあるといえる。この影響により、同行訪問に対する認識について「ストレスがある」「気が減入る」「緊張する」「不安がある」「気が重い」といった負担に感じている項目が密接にかかわる結果となっていると考えられる。これらのことより、同行訪問に対して訪問看護師自身の気が引き締まるものであると認識していることや、負担に感じている様子は、訪問看護事業所の外に学生と二人一組で訪問に向かうという実習の特徴が影響しているものと考えられ、訪問看護

師が同行訪問に対して持っている認識の特徴的な部分であるといえる。

本研究における調査項目と研究対象となった訪問看護師の属性に有意に関連があったのは、「好きだ」と現在の役割(スタッフ、管理者、実習担当者)、「気が重い」と実習指導者講習経験(訪問看護分野以外)の2項目であった。調査の結果、実習担当者が「好きだ」と肯定的な回答をし、講習を受講した経験がない者ほど「気が重い」と感じていた。実習担当者は各大学の実習目的や目標を理解し、それに応じた指導を行う役割を担うことが求められている(文部科学省, 2020)。また、実習担当者は実習の準備から運営に関して、大学の実習担当教員と連携を図る機会が多くある。このことから、実習担当者はスタッフよりも、実習目的や目標、必要な指導内容を知る機会が多い。そのため、実習担当者は自身に求められていることをより深く理解しているために、実習指導においても肯定的な意見を持つ結果となっていると考えられる。これは、実習指導者講習の受講経験の有無についても同様のことがいえると考えられる。

2. 同行訪問が及ぼす訪問看護師自身への影響に関する認識

同行訪問が及ぼす訪問看護師への影響についての項目で、看護を見直す機会になる(87.5%)、学びを深める機会になる(84.4%)、新たな発見がある(80.2%)、3つの項目全てにおいて「当てはまる」と回答したものの

割合が80%以上となった。このことから、臨地実習において学生を訪問看護サービスに同行させることに対して、多くの訪問看護師が自身にとって成長する機会であると肯定的に捉えているといえる。また、結果では「学びを深める機会になる」「看護を見直す機会になる」と実習担当者経験の有無、「看護を見直す機会になる」と実習指導者講習受講の有無(訪問看護分野・訪問看護分野以外)において有意差がみられた($p < 0.05$)。千葉、富田、横山(2020)は実習担当者のなかでも自ら進んで実習指導者講習会を受講した者や、専任体制で実習指導を行っている実習担当者ほど主体的・継続的に学習し、自己

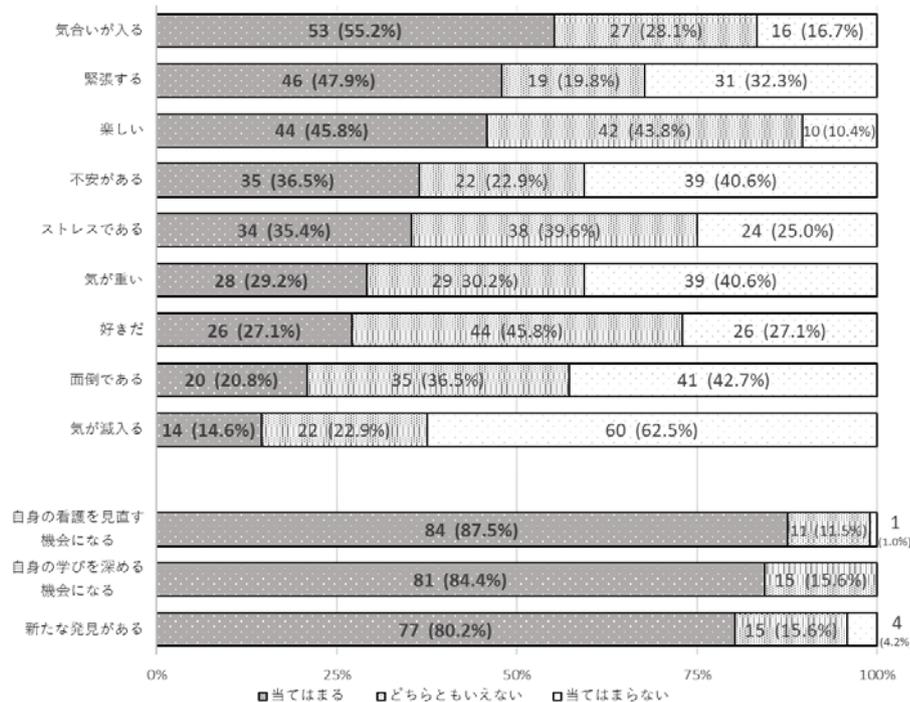


図1 同行訪問に関して「感じていること」および「自身への影響」(N=96)

表 2-1 「同行訪問についての感じ方」と対象者の属性との群間比較（有意差がみられた項目のみ抜粋）

項目	カテゴリー	気が重い				好きだ			
		当てはまる	どちらとも いえない	当てはまら ない	p値	当てはまる	どちらとも いえない	当てはまら ない	p値
現在の役割	スタッフ	9 24.3%	16 43.2%	12 32.4%	0.215	6 16.2%	16 43.2%	15 40.5%	0.027*
	管理者 (所長)	9 29.0%	6 19.4%	16 51.6%		7 22.6%	17 54.8%	7 22.6%	
	実習担当者	75 35.7%	10 25.0%	0 39.3%		13 46.4%	11 39.3%	4 14.3%	
実習指導者講習受講 (訪問看護分野以外)	あり	2 11.1%	11 61.1%	5 27.8%	0.006**	6 33.3%	9 50.0%	3 16.7%	0.524
	なし	26 33.3%	18 23.1%	34 43.6%		20 25.6%	35 44.9%	23 29.5%	

表 2-2 「同行訪問による訪問看護師自身への影響」と対象者の属性との群間比較（有意差がみられた項目のみ抜粋）

項目	カテゴリー	自身の学びを深める機会になる				自身の看護を見直す機会になる				新たな発見がある			
		当てはまる	どちらとも いえない	当てはまらな い	p値	当てはまる	どちらとも いえない	当てはまらな い	p値	当てはまる	どちらとも いえない	当てはまらな い	p値
実習担当者経験	あり	64 88.9%	8 11.1%	0 0.0%	0.035*	66 91.7%	5 6.9%	1 1.4%	0.049*	59 81.9%	10 13.9%	3 4.2%	0.718
	なし	17 70.8%	7 29.2%	0 0.0%		18 75.0%	6 25.0%	0 0.0%		18 75.0%	5 20.8%	1 4.2%	
雇用形態	常勤	75 88.2%	10 11.8%	0 0.0%	0.004**	76 89.4%	8 9.4%	1 1.2%	0.207	69 81.2%	12 14.1%	4 4.7%	0.431
	非常勤	6 54.5%	5 45.5%	0 0.0%		8 72.7%	3 27.3%	0 0.0%		8 72.7%	3 27.3%	0 0.0%	
実習指導者講習受講 (訪問看護分野)	あり	31 93.9%	2 6.1%	0 0.0%	0.062	33 100%	0 0.0%	0 0.0%	0.028*	30 90.9%	3 9.1%	0 0.0%	0.123
	なし	50 79.4%	13 20.6%	0 0.0%		51 81.0%	11 17.5%	1 1.6%		47 74.6%	12 19.0%	4 6.3%	
実習指導者講習受講 (訪問看護分野以外)	あり	13 72.2%	5 27.8%	0 0.0%	0.115	13 72.2%	4 22.2%	1 5.6%	0.028*	14 77.8%	3 16.7%	1 5.6%	0.935
	なし	68 87.2%	10 12.8%	0 0.0%		71 91.0%	7 9.0%	0 0.0%		63 80.8%	12 15.4%	3 3.8%	

を教育する力を有していることを明らかにしている。本研究では実習指導者講習受講の動機や、指導体制については限定していないものの、実習指導者講習を受講した者や実習担当者ほど、同行訪問を自己の成長に繋げていることが明らかとなっており、千葉ら（2020）の先行研究と類似的な結果を示している。そのため、訪問看護師のなかでも実習指導者講習を受講した者や実習担当者は、とりわけ同行訪問の経験を自己の成長に活用していると考えられる。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究の実施にあたり、A 県内の訪問看護事業所に所属する訪問看護師から協力を得ることができたが、有効回答数は 96 と少ない結果となった。また、研究の限界として、研究対象の代表性に関して、訪問看護師の年齢分布が保障されていない点が挙げられる。訪問看護実態

調査（公益社団法人日本看護協会，2014）の調査報告と比較して、本研究における回答者の 30 代の割合が 5% 低く、50 代の割合が 7% 高い結果となった。そのため、年齢分布の違いが結果に何らかの影響を与えた可能性が考えられる。以上のことより、本研究の結果を一般化して解釈することは限界があると考えられる。

本研究では、訪問看護事業所で行われる臨地実習の中で、学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識を明らかにした。結果を基に、学生を同行させる中でも訪問看護師が具体的にどのような場面で負担に感じているのか、また、実習指導者講習を受講した者や実習担当者がどのような指導経験を経て自身の成長に繋げているのかを明らかにしていくことが今後の課題であると考えている。

表3 「同行訪問についての感じ方」における各変数間の相関関係

	1)	2)	3)	4)	5)	6)	7)	8)	9)
1) 気合が入る		0.488**	0.332**	0.323**	0.218*	0.087	0.206*	0.056	0.220*
2) 緊張する			0.012	0.574**	0.513**	0.367**	0	0.205*	0.372**
3) 楽しい				-0.226*	-0.257*	-0.345**	0.450**	-0.361**	-0.465**
4) 不安がある					0.608**	0.553**	-0.113	0.374**	0.437**
5) ストレスである						0.689**	-0.220*	0.444**	0.548**
6) 気が重い							-0.274**	0.568**	0.560**
7) 好きだ								-0.351**	-0.212*
8) 面倒である									0.405**
9) 気が滅入る									

Personの積率相関係数

** $r < .01$ * $r < .05$

Ⅶ. 結 論

訪問看護事業所で行われる臨地実習において、学生を訪問看護サービスに同行させることに対する訪問看護師の認識を明らかにする目的で研究を行った結果、約半数の訪問看護師が自身の気を引き締めるような思いを持っていることが明らかとなった。それと同時に、多くの訪問看護師が学生を訪問看護サービスに同行させることについて、訪問看護師自身が成長する機会であると捉えており、実習担当者の経験がある者や実習指導者講習を受講している者ほど肯定的に捉える傾向があった。

謝 辞

本研究でWebアンケートにご協力頂いたA県下の訪問看護師の皆様へ心より感謝申し上げます。

付 記

本研究は令和5年度滋賀県立大学人間看護学部 地域交流看護実践研究センター『「共同研究」研究助成』にて実施した。

文 献

- 千葉今日子, 冨田幸江, 横山ひろみ (2020). 看護学臨地実習指導者の自己教育とキャリアコミットメントの関連. 埼玉医科大学看護学科紀, 13 (1), 21-29.
- 加藤和子, 高田恵子, 石原多佳子 (2022). 臨地で訪問看護ステーション実習を経験した学生の学び. 岐阜

成徳学園大学看護学研究誌, (7), 19-29.

- 菊池有紀, 塚原ゆかり (2022). みなし指定訪問看護事業所を利用する在宅看護学実習における学び. 日本看護学教育学会誌, 32 (1-2), 103-111.
- 公益社団法人日本看護協会 (2014). 2014年訪問看護実態調査 報告書. <https://cmskoho.nurse.or.jp/nursing/home/publication/pdf/report/2015/homonjittai.pdf> (最終閲覧日2023年11月22日)
- 厚生労働省 (2016). 特定分野における保健師助産師看護師実習指導者講習会実施要綱. <https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000749432.pdf> (最終閲覧日2023年8月5日)
- 厚生労働省 (2017). 訪問看護のサービス提供の在り方に関する調査研究事業 (速報値). https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000182797.pdf (最終閲覧日2023年11月22日)
- 松下裕子, 陶山啓子, 田中久美子 (2019). 看護基礎教育における訪問看護ステーション実習の学びに関連する要因. 日看教会誌, 29 (2), 13-25.
- 文部科学省 (2020). 看護学実習ガイドライン (案) (令和2年2月3日日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料). https://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf (最終閲覧日2023年12月7日)
- 野中弘美, 金子美千代, 米増直美, 久松美佐子, 益満智美, 丹羽さよ子 (2019). 訪問看護実習における学びの分析. 鹿児島大学医学部保健学科紀, 29 (1), 55-61.
- 東海林美幸, 森鍵祐子, 大竹まり子, 細谷たき子, 小林淳子 (2016). 訪問看護師の在宅看護実習指導における自己効力感と関連要因. 北日看会誌, 18 (2), 17-29.
- 滝島紀子, 大藪菜穂子 (2019). 臨地実習における学生の学びに影響を及ぼす要因—人的・物的環境に焦

点をあてて－. 川崎市立看護短期大学紀, 24 (1), 27-37.
・牛久保美津子, 飯田苗恵, 小笠原映子, 田村直子, 斎

藤利恵子, 棚橋さつき (2015). 訪問看護ステーションにおける訪問看護実習受け入れに関する状況. 北関東医学, 65 (1), 45-52.